

です。京都に帰ってから医者診察を受けると胃下垂ということでした。長い間温泉にいたので、さぞ立派な身体になっただろうという人もあったのですが、そうではなく、胃下垂になっていたのです。私はお昼の食事がすむと一人で運動に出かけていたのです。白浜温泉の背景をなす小高い山の中を、あちこち歩き回ったのですが、どうも身体の調子が良くないのです。それはただ漫然として歩き回るの、何にも勇む心、励む心がないため、緊張しないのではないのでしょうか、歩く時間が少なかったためでもありません。うか、歩き回る割りには身体の調子がよくなるらないのです。京都に帰る最後の一週間ぐらい前になつて、実さんとテニスを始めたのです。テニスをすると、ようし今度はこつち、今度はあつちと頭を働かせながら勇む心、励む心が出て来て、張り切つて飛び回るものですから、自然身体によい結果をもたらすように思えたのでした。しかしそれはもう遅かつたのでしよう。身体の調子が良くならないまま、京都にすぐ帰らなければならなかつたのです。

実さんが清書してくれたノートは随分たくさんのものでした。いよいよ明日は京都に立つという前の晩になつたのです。実さんがいつもの通り私の部屋に入つて来ました。そして、速記文字で書いた紙を私に見せたのです。何気なく読んで見ると「先生に差し上げるみやげものは何もありません。ただこれだけです！」と書いてあつたのです。そこを読み終わるころです。実さんは封筒に入れたものを差し出したのです。何気なく開いて見てあつとびっくりしました。それは血書した紙三枚が入れてあつたのです。「感激